こてゞ

むらく 著二

手と須と名ぐさ

[V.24]

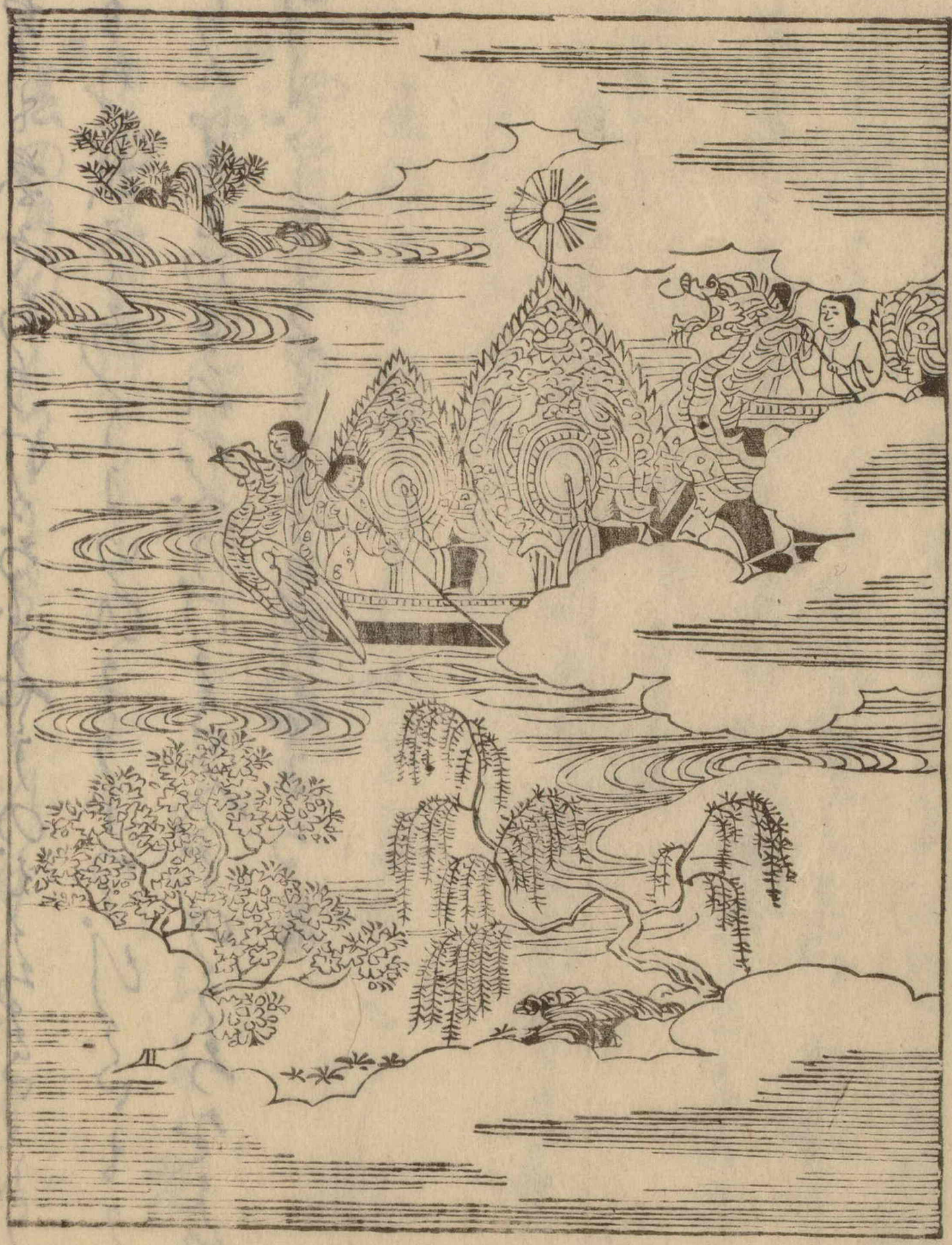
PL788
.4
.G4
1654
vol.24
Copy 1
Asian
Japan
Cage

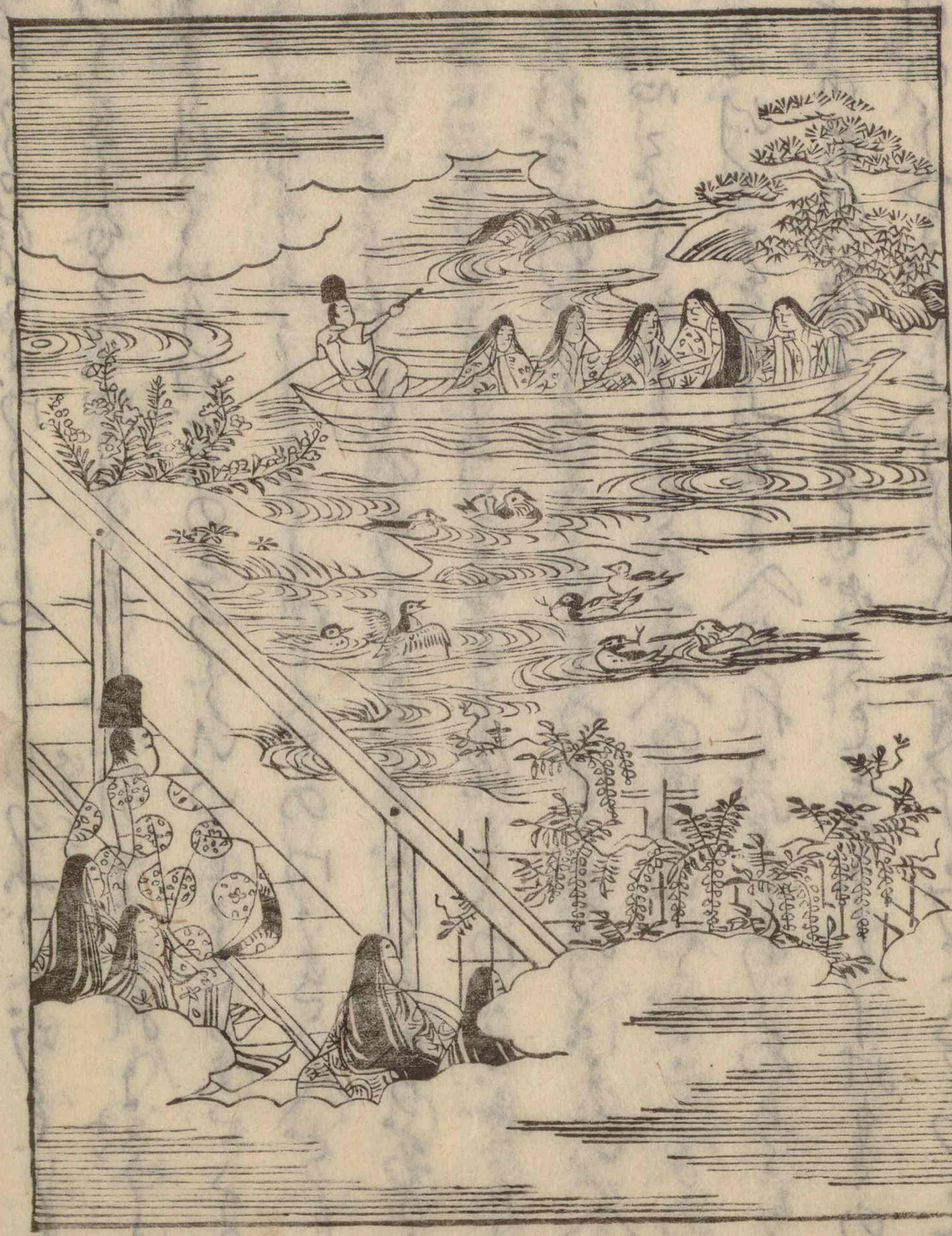
2004551302

やうのものの（堂ノ方ニおまし）
つれづれなるまゝにうちとけて
声（こゑ）ばかりをたどりたどりかよはしたまふ
ほどの気色（けしき）も山のこなたにて
うけばりの気色ならず（添）心もとなく
思ひあなづりたまへりしものを給ひて
いとゞ（添）あはれまさりたまふ
そゞろさむきころほひも
うちながめて（秋好中宮ばかり里におはします）
まゐれる人々のがくさうども
ひき遣（つか）はしたまふ
（笙）ひちりき（添）おとゝのものゝねども
それかとよりきこえて
ゆかしきほどに

この巻のあり(秋好ニ)ばんとおぼしたるに
りてゐるくうちひつろうきをまてあそ
びのべさせるのバ(秋好ノ女房ニ)うちの御めでたさ
ざえ(秋好ノ方ノ父ニ)これこのいりも(紫)こまる
ともをゝくはゝちうさ山を
ぐそのもとさまこもろれば(紫ノ方)その山のそれうこざ
まものてひんぐのりうとぬれる(紫ノ方)こまるのつさ
へぐあうあさをあよ(紫ノ方ノ兄ニ)誘引勧盃(さそうどうげさかづき)をうこのそひる
こくもうちうさまてちうさまこんぐ
れうぐゆものてまろうぐをてうあさ
ろ池の中よさ山

あそびつゝ　ほそき枝だに
波のおやまん　をまづ
よろこさとゝまねしさ
いひべうねまひつゝ　日ねも
土房れノ三の波ともの
風ふけど浪の　をくを
昂やまづさのさそこ
日
雲のはやかぜのう
やまづさそこもと
日ら
亀のこの山もうれしのうち老
もあそばうよのそん
日
雲の日のうらうよ母さ





地
皇慶

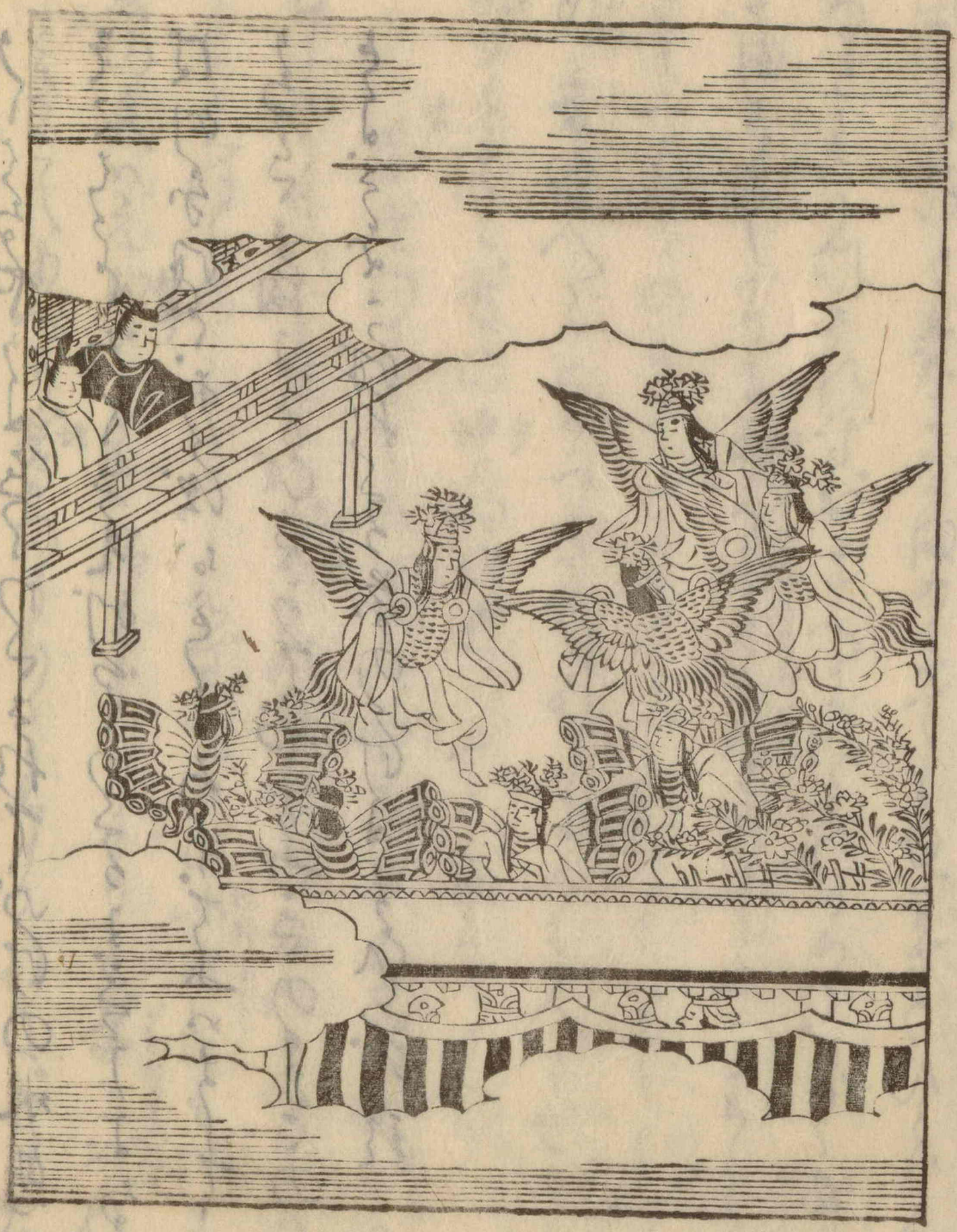
もえつめべうこ。つくちんごもあうべ〳〵。そうちう
こ
のころをもつて。四のなゐいとのれ。中ねもとくるぐく
もとうめべうり。学。をのうるもる。そ〳〵ごろなり〳〵けう
そうのころもうをものもの
ずこうてわびのへべ。うはけだうりてのまいろ〳〵そごこ
ふけさもいうそうこぐれ〳〵て。よちのて
れをうぐてちうびさこうまうれさ海いて
なう〳〵。おとば(原)もおばそこさ海れうこまいおばをど。
をめてそうばぐのをれ学ノそうめよれうけの川いで
よ。ふうでうもてちやそ川。ふのゆずいまう
よぐおまう。ふそんべうこ
やとすまひのよ

堂 むしろ紙のゆくゑも心をとめられでみちのく
ちげんをやいかなりけさ添 なごの名をおもふぐ
ぐーをとてなれのよ添 ふいとくいうゆくゑをて
添ノ
おもうをとちさぐでこよどもちるよどぐ先のへば。堂え
そちおぐれ治もぐで。地げ
面白ー。ふい中秋好ぐのぐ
ぐり。やぐでまぐで治もぐで。やすぐ家とり川ーひも
れこととくのふぐくぐもあるうさまるまあるは
まぐでちぐもおのふむまれはぐちよ。れ秋好あるる
まう治添なごのぐのえをもうてまうてされつさ

つくりのふみ、をとこもすなるものなれど、
女もしてみむとて、するなり。それの年の
おのれいとしたなきものへやりたりけるを、
ついつごもりになりて、おもひいでてやる。
心ざし。おもてもふれずなりにしを
こぞのやどにさくはなぞ。
とてやりたりけるを、返し、
こぞとやいはむことしとやいはむ
とかのみよしのさとにて、さくらをみて、
さくらをそこにてみるもののあるよ。やまずみる。
おもふどちもいくらもいでこよ。ここもあるさとのはな
つくさをのみ。これこのまへの山ざくらのやうに。
秋の野
出でて。おまへよ出でて。あの花をそこにうつして。
ちりとまがふやうにて。散るまでもみむ。

ふ　うらぶと表ごとうち風めぐりて
あるじもうけさわず　おまへ
さ風まして　うつくしあくるど（胡床　まへくらぶ）
どもみくのまもよりて　それどもこそべ
り（ざうう）者のへぐとりつぐそ　おうよろうへさせのふ
物をうそこ　夜の中ねのまつ（夕）
ぜそのことてふそさ（装束）
もいうろくるんこ（装束）　秋まつ
うとぬ色てゆくべ　れまみちのれうへ成
ず　吹日の朝（秋の夕）　夜通もげ（雨）
表のえいえおくさを（秋の夕）　（ぐをあると云ふ）
つくくあへう（比）　者のうそ　おれ
うそそまうねよ　者

ぐ・ふるやうにして・ゐの水鳥を。
そこもとにあくまでも・ゑえ
はひりながら・おうぼ・おうぼ・おうぼ・おうぼ
もろこしの風をよびよせて・やまぶきのはなびら
とも・ぶんぶんぶんぶんぶんぶん



なのすをとぢめて。さうべくべ。そくさうづ
そこで。づくべよなのぶさうりの。はさくくのはそうぶでふ
まだやまぶでさうの。そてしまさうあへ
るやうるう。地のそんぶともよいそろさひとうそう。そく
ざふ。ふ。中タ扣のそのは。あぢのはそ
るぶそへて。あのさうぞ。ふれ扣ふり。みり内さのふ
も扣よるそめべくくぶけのふれ扣ふり。みり内さのふ
扣扣
そてふよそそ片

ひがさをんぶて。ざりをばく。地とぞありけるぶぞぶれろ
上。うう。ふ。ふ。ふ

おくれまはおくで。そこらこころぐるしう。まうとく
のおやのさるそこらこれをもうこれと。人それぞれこころ
のなれどやうやうよろづよのひと人のようちよけ
れこそ。こころおもむけひるごはワやうやうする。
すうとはおのれどれもごだ(ダ)はえのけそひよういうとうく
おぼえて。これいうどめつうこころ有そひさうか。(初月ごろの夜)
べへのつまあうこうおうこまれうこころのひそそこの
気色もぐさへおやそうそうとうくありこそ。
ほのどやうおういうまもばだしろびのれおそびよて
そぐ給よ。墓のれむうこうこげくこよべのれおこうこげく
ありもそ。ほんそうこうおばそて。ども

それが済んでから、ゆっくりと
そのことを話すひまもなくすぐ
ふたりのことをおばさまに
いれてもらうために、
文を書いて、
やうやうと
ものやうのようにおまえの
ことばかりを
思いつづけて
ものでやうやうすこしも心
ぶんをうごかすことのできない
ようになりました。

水の色ーーー

もろびとおそれをもうべうをもうぞく
まへるごとくにてのべがたいうちそむてをもみす。
そだめいてをうてこのほそるぐる
ひごろの念のいろもあらはれこころちそおもひけぢうう
つまめそそ！まそるるもさはつへだおそうび
まくりーるぢりそこうばりまおはとうるう
そのそいうしまひろれ人のありま風をそもる
まふまそ。ちまそ面ようるびもう
心もてまつひのへれいらぢおうあまるもあ
やうまうてげるりぢ涙ふんもいと
ちちもうべうあぢうそ。おをもうちろそ

まうでよけうつかうまつりそ。（四ウ）
一一
ふふふ（ワラフ歟）ろこつを。まよふ
つゝへそ仍けう。まぐ（涼汀）
そそと宇ゆれがいとらうそ
せ。よぬ。ちなが。いうぶつ
公（くぎやう）ともうへぐ。この人の（樂）
おのおの（北木）中ねの。この
ぬ。まぐこそ。お（むと柏本と兄オノ）ろ。ここ
まうろう人ねり。なのつ
あれ。けちそんまいあそ
所あり。ゆこうそれあぐ（涼汀）
うりまやとゆ

あれめでたくもあるかなをのづからでうあへ
その心づくひ（日毛）おもしろくへうへ
のうたうねびすぐさうをいとひでこゝまむ
あれど。それもひと（日毛）のこゝろをみ（見）つゝ（日毛）
いくもあれば。そ風ぐ（日毛）うるさうもあべ
るわろ。うたぐ（日毛）風のこゝろもくしおかやあ
くまで。そ風とてこゝろやすからぬうたのさまざまあ
ともかゝれ（日毛）心よからぬ（日毛）をむしてぐ（日毛）
るずくてそ（日毛）ぐ（日毛）ものまうでこゝろやすからん

いとつやつやあひそめてうちそびくえもの
うつくさはうちまもりてまもりて
まもるのうちはうちまもりてまもりて
をのがうへをあひわすれうつくしみのそれ
うべいとそでうへとこそ詞
ねざりいでて
今ここにいうもんせうわけのあひもぢめ
りんわをがうぶのん中詞
名をいく衣とそうたうのうちは
さもおもほずうしいでんく
すんとこうもとも表れば、それおとぐの

れうろぢへのいとあ
まくうつこそれ給
るべずやと、芸物ぐ
ありさ両世中のあ
まうこそろとまつ
物べうおば、衰も
なふうへもうろ
人のあうる両よもあ
もろけどろるぞ
両もこつあべく
うこそろぢそ両そひて、

ものぼすまでこれ心ざ風をこそうのへれば
そこうろそて把(汙)のこそうへべくはまれーこうまふ
めうちをこうこうもうちょけこれこそこて給ん
こそ心ざこそこれとものへだおぐ(汙)これもーげ
ちくやいあうべさこそこそこうまへがいでやられ(汙)
こそもまこうこのびこうこうおもうこさありく
ありーれ心ざ風のおもひいでこうこうぐこうく
やもとゆーこそこうまへがおれ(ほん)心ざおぐいて
うこそもそこうろれいこそこうずもおうぐ
こそつぐこうれがのまひさこて心のうちょ人の
うこもこうこまあべくんと

あひいとおもしろうおぼゆるを、ほんくらうけさうのみとむうち
などしいでたるに、ゆかしきものにおもひて、ふみのびざうしに
まぎらはしいだしたるを、ゆかしうおぼえければ、ひそかにとり
あはせてみるに、ゆかしきことかぎりなし。夕霧八蓋左大将ノ心ナリ
それあれ。表紙のわざ、唐の中将のさうし。さうし
ざうのさまひとしくもあるかな。さしもあるまじ
きことをかきあつめて、ふみのつくりやうもあ
やしくもあるかな。うるはしきまじらひをも
て、おもてぶせにもてなしたるこそ、ほ
ととぎすのかたらひたるこゑなどのやうに
もあるまじきことかな。ふみのあるさまをも
ほ
ととぎすのかたらひ袖にとまれかしなどもかき
ともなきもあれど心ばせありてをかしきもあれ

袖のうへ

なひて、さいもそこうもものひろ
ふかいこころくうつるもんとゝ
色ももつれそれど、ちゝ(侍)
ばひろひろくもそくて
べくもあるれ心のゆどぞよ。さりげるくてをまて
くもおくもさひろ
そゝべそれがせよゝぬどひあ
ひをとづれ多ゆる人ぐ
あるいとこゝろさ心あるとづくる
べさつどそれがうそろくのおいとゝ
もつるれあや心るりよ

づきなれ心のありさまを。うらめしうのみそへて給
へるも。(涼地)なべて心うきものの(涼地)まことの文どもあまた
ありて。(ひ)やまずぐしてみつれど。人ごとにすぐれたる
ところさうそのうちにおいつくよ。すくくしうみゆる。
(涼文肩)ひとめでうつくしうおぼえ。(涼)ざうしのおもりしれうそ
そづきもつきれがうう。(涼)うちとけてれうう人どもありけん
ぐるひすびくるまをもわかなのくあり
それとさすがにおそろくそものしのひ
とこなてれうう(ひ)ぶりうれ云紫も。(ひ)ひとよくて

69038
6 AP78